

R-18



しーくれつと♡
クリニックへようこそ！

登場人物

立花 たちばな

樹 いつき

・
・
・
新人警察官。

23歳。

七森 ななもり

遥翔 はると

・
・
・
医療プレイ専門のSM店

「しーくれつと♡クリニック」の店主。

26歳。

二葉 ふたば

直人 なおと

・
・
・
七森の店で働く青年。

25歳。

「診察室」と看板のついた奥の部屋に通される。名前のとおり、病院のそれを模したのであろう室内は、白い壁紙で囲まれ、白いシートで覆われたベッドが鎮座していた。壁に沿って置かれた机の横には丸椅子が二つ並び、その傍に置かれたワゴンには、何やら医療器具らしきものも乗っている。イメクラプレイなどと宣伝する店らしく、なかなか凝った内装である。

この部屋まで案内したのは、件の二葉少年（青年だが）だ。看護学生のような、ブルーのワンピースに白いエプロンというコスチュームが、妙に似合っているのが恐ろしい。

「そのベッドに座って。ハル先生が診察の準備をしてるから、少し待っていてくださいね」

「ふざけんな、何が診察だよ。さっさと終わらせて手帳返せよ！」

「此の期に及んでノリも往生際も悪いのは男らしくないんじゃないですか？まあ、いいですけど」

可愛らしい表情を綻ばせて、くすくすと二葉が笑う。

促されるままにベッドに腰掛ければ、硬い感触と、どこからか漂う消毒液の匂いも相俟って、本当に病院にいるかのような錯覚をおぼえ、どうにも落ち着かない。

「お待たせ。ハル先生だよ」

遅れて入室してきた店主もまた、仕事着と思われる衣装に着替えていた。丈の異様に短い、胸元の開いた薄いピンク色のナース服に、今時珍しいナースキャップ。そして、レースのガーターストッキングと真っ赤なピンヒールが、如何にも、といった感じだった。大学時代に同級生に借りた、ナースもののA Vが脳裏を過ぎる。性欲を持て余した女性看護師が、夜勤中に入院患者とやり

まくる：という、ご都合主義な展開だったように思う。

それにしても、ハル“先生”なのに、衣装がナース服なのはど
うなんだ？？現実逃避のようにそんなツツコミが立花の脳内に
浮かぶが、七森と二葉の二人とも揃いも揃って女装な時点で、既
に立花の理解の範疇を超えているのだ。

「立花さん、今日は健康診断の再検査でしたね？なにか気になる
症状とか、ありますか？」

「別に」

猫なで声で七森が問うてくる。どうやら、このプレイはそうい
った“設定”で進むらしい。その茶番にいちいち乗ってやるのも
癪で、ぶつきらぼうに返答する。

「ふーん？それじゃあ、診察してみましょーね。服、前開けて、
ベッドに横になつて」

一度意識してしまおうと、聴診器が触れるくすぐったいような感触が繰り返されるたび、身を振りそうになる。

「緊張してるのかな？息止めないで、深呼吸してね？ゆっくり、吸って、吐いて……そう、いい子」

「っ、は……」

息を吐いた瞬間に、聴診器のベルを持つ爪の先が、乳首の先を掠めた。

「、っ……あ……！」

「あれ……？ずいぶん心臓ドキドキしてきたね？どうしたのかな」

「ッ、別に、なんとも……ないっ、……」

「ほんとに？おかしいなあ……もうすこし、詳しく診察してみないとね」

聴診器が、くりくりと押しつぶすように乳首を捏ねる。

「っ、ふ……う、」

妙にこそばゆいような感触を一度はやり過ぎたものの、幾度も繰り返し、同じ箇所を刺激される。

「っ、……、っは、あ……」

次第に、触れられるたびにじんじんと痺れるような感触がしてきて、息を吐いてどうにか気を逸らす。これまで意識することも無かったような場所なのに、この場の妙な空気にあてられている所為だろうか？

「うあッ……！？」

不意打ちのように、指で強く乳首を摘ままれ、思わず声が漏れた。

「あれ、オマワリさん、ずいぶん敏感なんだね？」

「うるっせ、っ……」

くだらない、ゴツコ遊びの茶番だと馬鹿にしていたのに、早速相手のペースに乗せられていることに歯噛みする。

「っふ、んん……！」

再び、聴診器で押しつぶすように、乳首への愛撫を再開され、ずくずくとした快感が腰に響く。

両方の乳首を、具合を確かめるかのように、指と聴診器で同時に刺激されれば、無意識に吐息が漏れてしまった。

「っ、あ、は……、」

「おかしいなあ、最初に『こんなのに興奮するような変態じゃない』……って言って言っただけだった？」

そう揶揄するように、くすくすと笑う七森に、ズボンの上から、下着ごと性器を掴まれる。固さを増したそこは、清廉なネイビー

ブルーの制服のスラックスをいやらしく持ち上げ、はっきりと存在を主張していた。

「あ……」

言い逃れのできない醜態をさらしているという羞恥に、居た堪れず、顔が火照る。

「こんなに腫れちゃって……次は、こっちも診てみないとね？」
「っ、！ちよつと、待て、」

七森にベルトのバックルを外されそうになり、慌てて手で押さえようとするものの、

「手はこつちですよ」とまた二葉に身動きを封じられる。

呆気なくベルトは引き抜かれ、はしたない有様を見せつけるようにゆっくりと、ジッパーが、次いで下着が下ろされれば、震える陰茎がぶると飛び出してきた。

「あれ、乳首だけでもうこんなになつてるよ。オマワリさん、先生に診察されて気持ちよくなつちやつたの？」

指摘され、さらに羞恥心がつのである。

「う、うるささ……違うつ、……あ！？」

あまりの恥かしさに反応が遅れたところに、七森に陰茎を握りこまれる。

「っひ……ん、っ、」

「違うの？でも、どんどん腫れてきちゃったよ……？ほら、」

醜態を知らしめるように、根元から先までをゆつくりと撫で上げられる。ついでのように、裏筋を紅い爪で軽く引っ掛かれ、亀頭をぐりぐりと指で押しつぶされる。同じ男同士であるからか、泣き所を的確に責められ、このまま直接的に刺激されればすぐにも達してしまいそうだった。今日出会ったばかりの素性もロク

に知らぬ相手の手でいいようにイカされるなど、悔しさと情けなさで、考えるだけでも憤死しそうだ。

「っあ……っあ……や、やめ……」

「ふふ、顔、ぐずぐず。泣いちやう？まだ全然、コースの時間残ってるけど、降参？」

「っ、誰がつ……！」

「そうだよね？まだまだ、これからが本番なんだし」

七森が飄々と笑う。

「あ。そーだ、この先に進む前に、ひとつ。秘密のコトバ教えとくね——」

続けて耳元で囁かれたのは、この場、この文脈には全く相応しくないような、とある果物の名前。突拍子もない一般名詞の登場に、怪訝な顔をしたこちらに、七森が続ける。

「どーしても無理、耐えらんない、もう降参、許して……ってなつたら今のコトバ言つてね。セーフ・ワード、って言うんだけど。……まあ、つよい子のオマワリさんには、必要無いと思うけど？」
言うだけ言つてニコリと微笑むと、七森は傍のワゴンを引き寄せ、何やら物色し始める。

「さてと……じゃあ、診察の続き……精密検査、しよつか」
様々な道具の載つたワゴンから七森が取り出したのは、細長い管だった。

「……？何だよ、それ、」

用途に思い当たらず、疑問を口にしたこちらに、七森が得意げに続ける。

「ふふ、尿道カテーテルっていつてね？おちんちんにこの管を入れて、膀胱まで通して、おしっこを出しちゃうんだよ♡」

「は、……？嘘だろ……！？」

さりと恐ろしいことを宣う七森から逃れるべく、慌てて起き上がるとするが、両脇から、二葉にがちりと身体を押し込まれる。可愛い顔をしてどこにそんな力があるのか、抵抗しようとしてもびくともしない。

「ほらほら、暴れないの」

「逃げちゃダメですよ」

身体を押さえ込まれたまま、手首と足首を、それぞれ、ベルトのようなものでベッドに固定されてしまった。

「い、嫌だ、離せ、止めるよ……！」

「そんなに怖がらなくて大丈夫だって、最初はちよつと痛いかもしれないけど……それも気持ちよくてクセになっちゃうから」

先ほど記憶の片隅に思い出した、ナースもののAVなどという発

想は如何に甘いものであつたかと今更ながらに思う。

両手足を拘束されたことはいよいよS Mじみてきて、これから自分がされようとしていることへの恐怖に、背筋を冷たいものが伝つた。そうだ、最初の通報では、此処は「S M性風俗店」といつた触れ込みだつたではないか。

「ふふ、その怯えた顔、すつごく可愛い。普段、M男くんのアへ顔ばっかり見てたからさあ。オマワリさんのその顔、新鮮でいいなあ」

——いっばい虐めてあげるね。そう囁き、ぺろり、と七森が舌なめずりをする。

「っ、ひ……！」

消毒液の染み込んだ脱脂綿で、鈴口を撫でられる。敏感な場所に綿球が触れるたび、ひくりと腰が震えた。先ほどの前戯で敏感になった身体には、過酷なほどの刺激だった。

「う、あ、あ……！」

しかし、七森の手つきは、先ほどまでの性感を煽るようなそれとはうって変わって、医療行為然とした淡々としたものだ。

「消毒してるだけなんだけど？動かないで、我慢してくださいね？」

「……っふ、うう……」

冒頭に、「健康診断の再検査」……などと言っていた、あくまで医療行為であるという、プレイの設定はまだ一応、継続しているらしい。医療器具を用いて、そして淡々とした手つきではあるも

の、しかしその責めは容赦のないものだった。綿球で鈴口を撫で回したかと思えば、次に、ゆっくりとカリ首の周囲を辿られる。執拗なまでの責めに、がくがくと腰が震える。

「つやあ、ツ：そこツ、止め、ひいッん……」

「ちちゃんと消毒しないとね。……ほーら、動くなつて」

ぴしゃりと、叱咤するようにそう言われ、つい反射的に従ってしまう。

「こんなもんかな。じゃあ、管入れるよ？」

七森がにこりと微笑み、こちらに見せつけるように、カテーテルとやらを用意する。柔らかかそうな素材のようだが、それなりの太さがあり、また、その長さに尻込みする。尿道からこれを入れるられるなど、拷問の類ではないだろうか？

「ほ、ホントにそんなの入れるのかよ……!？」

「そーだよ♡検査のためだから、頑張つてね？…：はい、力ぬいて。潤滑剤塗るからちよつと冷たいかも」

「っ、あ…：！」

ぬるぬるとした潤滑剤の感触に次いで、つぶ、と鈴口に管の先が侵入してくる。潤滑剤のゼリーのおかげか、抵抗もなく管が入ってしまふ。しかし、次第にじりじりと感じる痛みに加え、本来はモノを受け入れる場所ではないであろう器官に異物を挿入されていくという、本能的な恐怖が湧き上がる。

「う…：、っ、ぐ、痛、っ…：、！痛え、つよ…：！」

「ああ…：痛いですねえ、かわいそう」

傍に控えていた二葉が宥めるように髪を撫でてくるが、気休めにもならない。苦悶に歪んでいるであろうこちらの表情を、どこかうっとりとした様子で眺めているのが、そら恐ろしい。

「立花さん、力抜いて、お口で、はーってゆっくり息してみましようか？」

二葉も二葉で、容赦をしてくれる気は無いらしい。苦痛に逃げを打ち、ずり上がりそうになる腰を押さえつけつつ、頑張りましようね、と無責任に励ます。

「っ、う、…は、あ、あ…！」

七森の手によって、管はずぶずぶと容赦なく侵入を果たしていく。痛みもそうだが、排泄器官を異物が逆走してくる違和感が強い。身体を内部から蹂躪されているようで、背筋までぞくぞくと響くような悪寒がする。

「うう、っ、も…：嫌だ…：抜けよ…：！！」

「でも、もうだいたいぶ飲み込んだじゃったよ？あとちよつとで膀胱。ソコまで入れたら、おしっこ出てきちゃうよ。俺たちに見られち

やうね……恥ずかしいね？」

「つつ……！　そんな、嫌だ、つ、もう、止めるよ、本当に……！」

「はあ、ヤダヤダってばかり、興奮めなんだけど……。仕方ないなあ、じゃあ、そういうときは何て言うんだっけ？　さっきの秘密の言葉。ほら、忘れちゃったの？」

「つつ……、」

七森が先立って提示した例のワードを、脳内で反芻する。

「オマワリさんのくせに、弱っちーの……情けないなあ、もう降参？」

挑発するように、くい、と管をほんの少し引き抜かれる。

「……っ、あう、うう……っ、クソ、……！！　っ誰が……！！」

思わず無意識に、口をついて出てきたのは反抗の言葉だった。

「へえ……？　じゃあ、もうちよつと頑張れるかな？　いい子だね」

「っ、あ……！？」

反射的に否定してしまつたが、判断を誤つたかもしれない——
そう思う間もなく、責めが再開された。管の挿入は続けつつ、次
いで、痛みで一度は萎えていた肉茎を、片手でやわやわと刺激さ
れる。そうされれば現金なもので、神経は脳に快楽を伝えてくる。
与えられる痛みと快楽がない交ぜになり、混乱が生じる。

「っ、ひ、！？あああ……！？ッそこ、や、っ」

管がさらに挿入され、とある一点を掠めたとき、これまでにな
い感触が背筋を走り抜け、思わず背がしなつた。

「ん、ここ？」

「あ、っ……！？あ、っ、や、何……：奥……：や、やだ、あっ、あっ……！」
その場所を確かめるかのように、ゆっくりと、管を何度か抜き
差しされる。

「あ、っ、うあ、止める、…！！やだ、嫌だ、気持ち悪い、痛っ…！、それ、も、止める、抜けよ…！、っひ、！」

じわじわとした痛みと、新たに襲い来る強烈な感覚にそら恐ろしくなり、情けないことに自身の口からは泣き言が漏れるが、七森は容赦することはなかった。

「もうヤダヤダは聞かないよ。ね、ちんちん、また硬くなってる…この状態で嫌って言うてもね」

一度は痛みに萎えていたものの、刺激に再び勃ち上がり、硬さを増した肉茎を、七森の指がつい、と撫でる。

「いまナカで当たってるの、膀胱の手前で、前立腺ってトコなんだけど。そこ気持ちいいみたいだね？」

「は、っ、っああ、そんな、知らなっ、あ、うああああ…！」「こんな場所で、性感を感じてしまうなんて。未知の感覚に戸惑

出したばかりだというのに、また排泄したいような、むず痒いような刺激を内部から与えて来る。まだ責め苦は終わらないのか、という絶望と、与えられる新たな感触に快楽を呼び起こされ、先ほどから脳内は混乱し通しだった。

「ひ、ぎつつ……！！？や、あ、それ、引つ張るの、やめる……！！
ひア、う、ああ……！！♡」

「ふふ、ここ気持ちいいんだ？」
「っ、りりりっ、あ、あア、ツや、」

七森が管を入れては引くたびに、膨らんだバルーンがこん、こん、と敏感な場所をノックするのだからたまらない。膀胱を内部から刺激され、さらに、管が前立腺を掠めるのだ。じんじんと腰に響く快感に、また陰茎が硬さを増していくのがわかる。

「あ、っ、あっあっ……それ、や、ああああ……！！♡♡ア、あ、

ツ　　ツ　　ツ　　！！

「あーあ。市民の模範にならなきゃいけないお巡りさんなのに。医療行為でこんなにおっ勃てて、ヨガつて、恥ずかしいね？この、変態」

「っ、あ、う、うあ、違うっ：ちがう：ツ、あ：ンツ♡」

「違う？こんなにして、どのツラ下げて言ってるの？ん？」

七森がそう言っつて、咎めるように握り込んだ陰茎は、すっかり天を向いて勃ち上がっていた。

「ここ、随分苦しそう。早くこっちも出したいね？」

七森の手が、管を咥え込んだまま、はくはくと収縮している鈴口をゆっくりと撫でる。

「ア、！♡っ、や、やらあああ：！！つも、う、イク、出る：：：！！」

「そろそろイきたい？うん、いいよ、イッて」